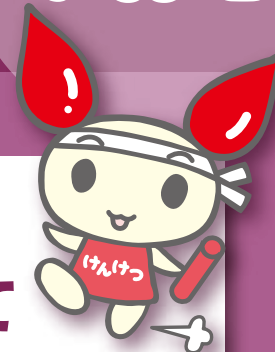




企画・発行 日本赤十字社中四国ブロック血液センター 学術情報課 Tel 082-241-1619  
協力 中四国ブロック内各赤十字血液センター



## 特殊製剤国内自給向上対策事業とB型肝炎ワクチン追加接種プログラムの推進について

〔特殊製剤国内自給向上対策事業〕とは、血液法の理念である血液製剤の国内自給を達成するため、抗HBsヒト免疫グロブリン製剤(HBIG)の原料であるHBs抗体価の高い原料血漿の国内自給体制の整備を目的とした厚生労働省の委託事業(平成26年度～)で、HBワクチン既接種者に対してHBワクチンを追加接種し、接種者のデータベースを作成することを目的としています。

〔B型肝炎ワクチン追加接種プログラム〕は、「特殊製剤国内自給向上対策事業」を受け、日本赤十字社が勧めるプログラムで、対象となる献血者(及び医療関係者)にワクチンの追加接種を行い、献血していただくことで「特殊製剤国内自給向上対策事業」の目的達成とHBIG用原料血漿および高力価HBs抗体保持献血者の確保を行うものです。

使用目的別では肝移植後再活性化予防での使用が最も多くなっているHBIGの平成27年度総供給量は17,230本(1,000単位換算)ですが、その国内自給率は他の血漿分画製剤と比べ極めて低いのが現状です(図1、図2)。

そこで、HBIG国内自給への方策として、献血者の中から条件(\*)を満たしたHBc抗体陰性かつHBs抗体陽性の方に協力をお願いし、同意が得られた方にHBワクチンを追加接種させていただき、その後の献血によりHBs抗体高力価献血者を抽出の上、複数回の成分献血を依頼します。プログラム全体の流れは(図3)のとおりです。

本事業は、平成26年度から医療従事者(赤十字病院、国立病院機構、血液センター職員)の皆様を対象に開始しました。更に平成28年度からは、対象を全ての献血者に拡大しています。(中国四国9県の協力者数:平成26年度:156名、平成27年度189名、平成28年度304名)

HBs抗体保持献血者の多くは、医療に従事されている皆様です。今後とも、本プログラムの趣旨をご理解の上、成分献血にご協力いただくと共に、血液センターから案内文が届きましたら、本プログラムへのご協力をよろしくお願い致します。

(※)詳細については最寄りの血液センターにお問い合わせください

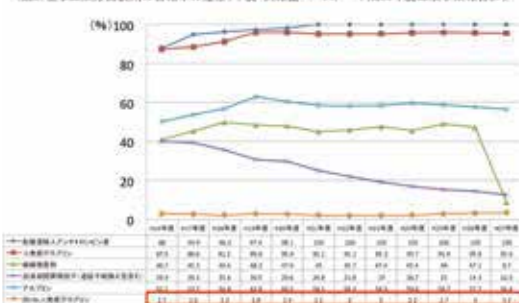
(中四国ブロック血液センター 総務企画課 重田達身)

(図1)HBIGの使用実績(平成27年)

使用目的	使用規格	使用施設数	使用本数	割合 (%)
母児感染予防	筋注 200単位	469施設	1,407本	8.1%
	筋注 200単位	22施設	63本	0.4%
針刺し事故対応	筋注 1,000単位	182施設	344本	9.9%
	静注 1,000単位	202施設	376本	10.9%
肝移植後再活性化 予防	静注 1,000単位	39施設	2,442本	70.7%

※平成27年度HBIG供給量(平成28年血液事業報告)  
17,230本(1,000単位換算) そのうち、国内献血由来560本 ⇒ 国内自給率3.2%

(図2)主な血漿分画製剤の自給率の推移(年度・供給量ベース) 平成28年度血液事業報告より



(図3)プログラム全体の流れ



【4つの安心サポート】

1. 本事業に同意した後も同意を撤回できます
2. 万が一健康被害が発生しても補償制度が適用されます
3. 個人情報には厳重に管理し、本事業の目的以外には使用しません
4. ワクチン接種に関する費用の負担はありません

# 平成29年度赤十字血液シンポジウム ～ 共催センターとして ～



平成28年6月、中四国ブロック血液センターから『平成29年度は愛媛開催』と依頼され、今回のシンポジウム開催の1年以上前から準備が始まりました。会場探し、内容をどうするか、所内及び中四国ブロック血液センターと相談しながら手さぐり状態でした。

血液製剤の使用指針が3月に改定される予定でしたので、改定指針について取り上げてはどうかということになりました。また、昨年度広島会場での『在宅医療と輸血』に関する講演が好評だったため、愛媛県でも取り上げたいと思いました。

指針については、【赤血球】は愛媛県の地域中核医療を担う市立宇和島病院の坂尾寿彦先生(心臓血管外科科長)に自施設での新指針に即した適正使用への取り組みについて、【血小板】は愛媛大学医学部附属病院の羽藤高明先生(輸血・細胞治療部特任教授)に今回の改定の基盤となった科学的根拠の解説と共に、これらのエビデンスを実際の臨床現場でどのように適用して行くのがよいのかについて、【新鮮凍結血漿】は日本赤十字社近畿ブロック血液センター所長の藤村吉博先生にTTPとHUSの病態解析とその治療法の進歩に焦点を絞り、FFPの前方視的、効果的治療薬選択についてご講演いただきました。また特別講演【在宅医療と輸血】では香川県で在宅診療をされている敬二郎クリニック院長の三宅敬二郎先生に在宅医療についてお話しいただきながら、在宅での輸血が是か非か、という大きなテーマについてご講演いただきました。参加者は先生方のご講演に聴き入り、アンケート結果からも内容的に十分満足していただけたようでホッと胸をなでおろしています。

共催センターMRとしては1名でも多くの方にご参加いただくことが大きな課題でした。5月に中四国ブロック血液センターから案内パンフレット等が届き、医療機関の輸血部、検査部、薬剤部、看護部、事務部に案内を始めました。今回は在宅医療と輸血に関する特別講演があったため、医療機関以外にも薬学部、医療技術大学、看護大学、看護ステーション等を訪問して案内を行いました。愛媛県医師会には会員向けに案内をFAX送信していただき、また愛媛県薬剤師会には会員向け回覧板に2回も掲載していただくなどお力添えをいただいたこともあり、参加者264名のうち約6割が愛媛県内からの参加でした。

今回、遠方のためご参加いただけなかった方には、中四国ブロック血液センターがホームページにシンポジウム抄録集と共に、当日の講演スライドを掲載しています。

(<http://www.csk.bbc.jrc.or.jp/news/blood-symposium.html>)

来年のシンポジウムは平成30年7月28日(土)に岡山県医師会館で開催されます。

(愛媛県赤十字血液センター 学術・品質情報課 井上誠一)

